

「ブライト・スター いちばん美しい恋の詩」 ★

★★

2010（平成22）年5月17日鑑

賞<東映試写室>

監督・脚本：ジェーン・カンピオン

ファニー・ブローン（ブローン家の長女）／アビー・コーニッシュ

ジョン・キーツ（詩人）／ベン・ウィショー

チャールズ・ブラウン（ジョンの親友）／ポール・シュナイダー

ブローン夫人（ファニーの母親）／ケリー・フォックス

サミュエル（ファニーの弟）／トーマス・サングスター

マーガレット（ファニーの妹）／イーディ・マーティン

2009年・イギリス、オーストラリア映画・119分

配給／フェイス・トゥ・フェイス

<劇作家がシェイクスピア、小説家がディケンズなら、詩人は？>

あなたは若くして夭折したフランスの詩人アルチュール・ランポーを知ってる？ また日本の詩人中原中也を知ってる？ 2人とも知ってるあなたなら、25歳の若さで夭折したイギリスのロマン派詩人キーツを知ってる？ プレスシートによると、今は亡き作家辻邦生はイギリス文学で3人の巨匠の名を問われれば「劇作家シェイクスピア、詩人キーツ、小説家ディケンズ」の名を挙げると言ったらしいが、寡聞にして私はジョン・キーツについては未だ聞いたことがない。

他方、本作のタイトル『ブライト・スター』とは？ これはキーツが1819年に書いた詩、『輝く星よ』をタイトルとして使ったものだが、ベン・ウィショー演ずるキーツにとっての「輝く星」はアビー・コーニッシュ演ずるファニー・ブローン。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は世界中の誰もが知っている敵同士の家生まれた美男美女の恋物語だが、本作が描くキーツとファニーの悲恋は人為的に引き裂かれた悲恋ではなく、昨今流行りの病気による悲恋物語。今でこそ結核による死亡はごくわずかだが、日本でも中原中也や樋口一葉の結核は有名で、結核は不治の病とされていた。それと同じように、1818～1819年のイギリスのロンドン郊外のハムステッドを舞台とした本作においては、結核にかかったキーツの回復は到底不可能。せいぜい寒いハムステッドでの冬を避けて、暖かいイタリアで養生するくらいしか手がなかったらしい。

本作を観ることによってイギリスでは超有名な夭折の詩人キーツと、ファニーに対するキーツの純愛を知ることができたのは収穫だが、すべてが即物的となり手っ取り早くなった現代の恋愛論から当時のキーツとファニーの純愛をみていると、美しいと感じる反面、ついイライラ感も・・・。

<詩ではメシが食えないのは、今も昔も同じ？>

キーツが最初の詩集『エンディミオン』を出版したのは1818年。私の大好きなルイーザ・メイ・オルコットの『若草物語』では4人姉妹の次女ジョーが心を込めて書いたはじめての小説が大ヒットしたが、さて『エンディミオン』は？

キーツがハムステッドに住む親友ブラウン（ポール・シュナイダー）の家に住むことになったのは貧しさのため。もっとも、不動産法に詳しいと自負し『実務不動産法講義』（民事法研究会・2005年）を出版した私でも、本作に描かれるロンドン郊外ハムステッドの不動産賃貸事情はよく理解できない。ブラウンは毎夏旅をする間親しくしている隣人のブローン家に家を貸しているらしいが、ブローン家の長女ファニーと犬猿の仲ならあえてブローン家に家を貸さなくてもいいのでは？ さらに、ブラウンと同居していたディルクス夫妻が旅行に行く間、ファニーの家族がそこに住むことになり、その結果キーツの寝室とファニーの寝室が隣り合わせになる風景が描かれるが、その意味もイマイチ理解が困難だ。

またブラウンとは波長が合わないファニーが、ブラウンの親友キーツに魅かれていくサマはそれなりの説得力をもって描かれるが、色男にカネと力がないのと同様、詩人にカネがないのは今も昔も同じ？ 今でも根本は同じだが、19世紀前半のイギリス社会では、全く経済力のない娘を結婚させるには男がそれなりの経済力を持っていることが不可欠。したがってファニーの母親ブローン夫人（ケリー・フォックス）にしてみれば、いくらファニーがキーツと魅かれ合っても2人の結婚を認めることができないのは当然だ。ロミオとジュリエットの恋物語の障害は敵同士の家だったが、キーツとファニーの恋物語の障害はカネ。そう考えると一方ではえらく親しみを感じるかもしれないが、どうして詩人は今も昔もメシが食えないの？

<結婚までは、あくまでプラトニック？>

本作は、『ピアノ・レッスン』（93年）でアカデミー賞脚本賞、主演女優賞、助演女優賞の3部門をはじめとするたくさんの賞を受賞したニュージーランド生まれの女性監督ジェーン・カンピオンの作品らしく、恋に落ちたキーツとファニーの心のひだを丁寧に描いていく。ブラウンの目にはファニーは「仕事の邪魔をする気まぐれな女」としか映らないらしいが、そんなブラウンとの確執をよそに、キーツとファニーの想いは深まっていくばかり。

日本では「男と女がひとつ屋根の下に住めば、自ずからなるようになる」と言われているが、本作におけるキーツとファニーはまさにひとつ屋根の下で生活していたから、なるようになるのは時間の問題？ 本作には郊外の森を散歩するキーツとファニーの姿が再三登場する。2人がはじめて唇を重ねたのも森の中で、キーツが脱いだ上着の上に2人して横たわったとき。そうなれば、後は一気呵成に……。交際すればすぐに肉体関係をもつ、現代のスピーディーな恋の展開に馴れた私の感覚はそうだが、さて19世紀はじめのキーツとファニーの恋模様は？

いつの間にかメイドの女性を妊娠させ、そのことに思い悩むブラウンの姿をみると、キーツとファニーだって……。私はそう思うのだが、キーツとファニーの恋愛は結婚まではあくまでプラトニックらしい。もっともキーツがファニーのことを思いながら書く詩はかなり官能的だし、時折見せるファニーの胸元も豊満そのものだから、あまりプラトニックにこだわる必要はないのでは？ 私などはついそう思ってしまいが、あくまでプラトニックを貫いたからこそ、2人の悲恋が今日まで語り継がれ、キーツの詩が永久に生き続けているのかも？

2010（平

成22）年5月19日記